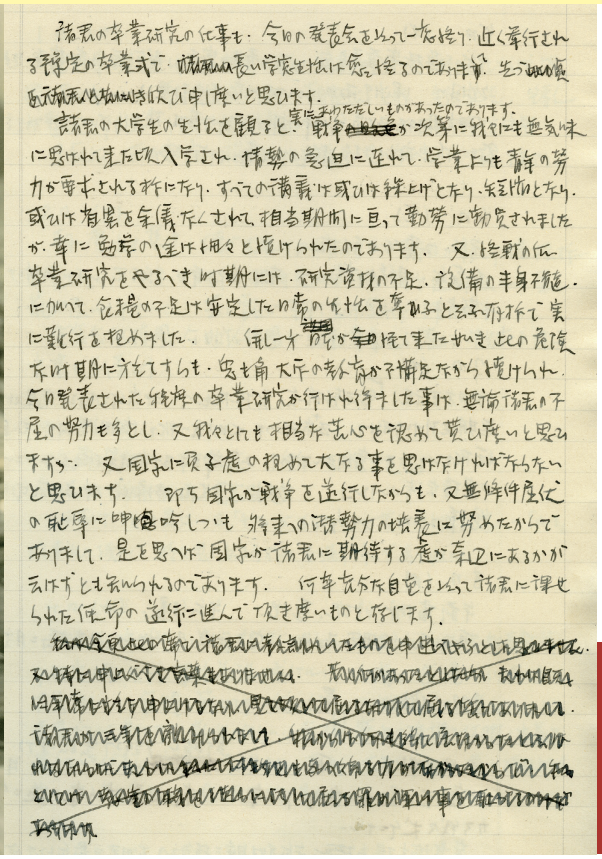
ISSN 1347-6211

# 東北大学史料館だより

No.24
2016 Mar.

## TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

2 東北学院史資料センターのご案内
東北学院史資料センター長 河西晃祐
5 連携企画展開催報告
6 資料の公開について
7 史料館のうごき
8 署名と捺印からみた初代総長・沢柳政太郎
東北大学史料館教育研究支援者 小幡圭祐

写真：工学部金属工学科の的場幸雄主任教授
資料：的場の日記に記された卒業生への挨拶の原稿
（いずれも工学部金属工学科文書）

## 帝大教授の矜持

戦中戦後の工学部金属工学科のある学生の回想を紹介しましょう。1945年（昭和20）７月10日の仙台空襲で東北帝国大学の位置する仙台は甚大な被害を受けましたが、同学科では、翌日も学校での講義が行われ、出席者も結構多かったといいます。また、８月15日の玉音放送も金属工学科の玄関前に集合して聞き、複雑な思いで翌日一応学校に出てみたら主任教授の的場幸雄の講義が時間通りにあり「別令があるまで予定通り講義を続けます。」と前置きをされて普段通りに講義が続けられたそうです。これをこの学生は「斯様に学校は当時は、学問をするための場所であり、学業を行うことが優先する所であったとしみじみ想うにつけ、現在の学生生活との差を感ずる」と回想しています（『るつぼ　創立50周年記念号』）。

一方の的場教授も日記を残しています。1946年（昭和21）９月卒業研究発表会の席上、「研究資材の不足、設備の半身不随に加えて食糧の不足は安定した日常の生活を奪ふと云ふ有様で実に難行を極めました」としながらも「何卒充分な自重を以つて諸君に課せられた使命の遂行に進んで頂き度いものと存じます」と卒業生に力強く餞の言葉を送ったようです。実際は「私は今更此の席で諸君に教訓めいたものを申述べやうとは思ひません又特に申上ぐべき言葉もありません」「私としては教室の職を徒らに汚して居る罪の深い事を恥づるのみであります」と自身の無力さを恥じていたようなのですが、この一節はあえて言わなかったのか抹消しています。学生が戦争に翻弄されたことはもちろんですが、その鑑たる帝大教授の悩みも相当に深かったとみえます。

# 東北学院史資料センターのご案内

東北学院史資料センター長　**河　西　晃　祐**

2015年９月25日（金）から2016年１月29日（金）まで、東北大学史料館と東北学院史資料センターの連携企画「学都仙台と戦争」を開催させていただきました。2015年10月24日（土）には、東北大学と連携した「ギャラリー・トーク」を開催し、両大学を周遊しながら見学してもらう企画に対しても参加者を得ることができました。

さて「東北学院史資料センター」とは？ 聞いたことのない名前だが？ そのような方もいらっしゃるかもしれません。実は東北学院史資料センター（以下、史資料センター）は２年前の2014年４月に発足したばかりの組織です。今回は『東北大学史料館だより』の紙面をお借りして、当センター設立の経緯と所蔵資料について紹介させていただきます。

## １：東北学院史資料センター開設までの経緯

東北学院の歴史は、1886年（明治19）に押川方義が仙台神学校を開設し、1891年（明治24）に東北学院と改称したことから始まります。その後（旧制の）専門学校に認可され中等部を開設しました。1918年（大正６）には専門学部が神学科、文科、師範科、商科体制へと変化するなど、数度の改組を繰り返しながら、1944年（昭和19）には時勢に適合した航空工業専門学校への改組を迫られました。新制大学として認可されたのは1949年（昭和24）のことです。

このような歴史的経緯をまとめ、後世に伝えるために1990年には『東北学院100年史』の刊行が開始され、2001年には広報課の一組織として、史料の「公開のみ」をおこなうために東北学院資料室が開設されました。一方、東北大学史料館のような歴史資料を体系的に収集・整理するための組織は作られませんでした。よって100年史編纂過程で収集された膨大な資料も、未整理のまま収蔵部屋に押し込まれていた状況が長く続きます。

そのような状況が変化し、2014年に史資料センターが発足したのは、2012年に本学敷地内にあるデフォレスト館が、2014年には本館、礼拝堂、大学院棟が登録有形文化財に指定され、2013年に創立125周年記念として図録『押川方義とその時代』が刊行された中で、本学の歴史を改めて振り返る自校史教育の必要性も認識され、歴史資料の重要性に目を向ける機運が高まったからだといえます。

とはいえ、専任教員、専任職員や学芸員の配置はこれからの課題であり、まだまだ発展途上であることも事実であります。特に昨今の私立大学の運営が厳しさを増す中で、「何とか予算と人員を増やすためにも、学校法人に対しても広く一般の方々に対しても、史資料センターの活動を認知してもらわなければ」、それが2015年４月にセンター長に就任した論者の想いでした。このような中で冒頭に挙げさせていただいたように、東北大学史料館との共催企画のお話をいただけたことは、我々にとっても非常にありがたい援護射撃となりました。

## ２：東北学院史資料センター所蔵資料の概要

つぎに当センター所蔵資料について簡単に紹介したいと思います。繰り返し述べてきた通り、史資料を体系的に収集整理する部局がなかったために、現在までのところ手当たり次第に学内の史資料を探し出し、来

歴などを調査している段階ですが、史料的価値の高い一次資料群は次のような分類に区分できるとみています。

1．「押川家文書」＝学祖押川方義、方存（春浪）、清関係資料約3000点以上
2．『大学100年史』編纂収集資料（膨大な量で把握できず）
3．『主務省関係』綴29冊
4．『往復文書類』綴23冊
5．その他　『学校教練関係書類綴』３冊、『連合国最高司令部関係』１冊、『理事会記録』、『学院時報』、『学生新聞』（それぞれ多数あり）

このうち、今回は１の「押川家文書」と５の『学校教練関係書類綴』をご紹介したいと思います。

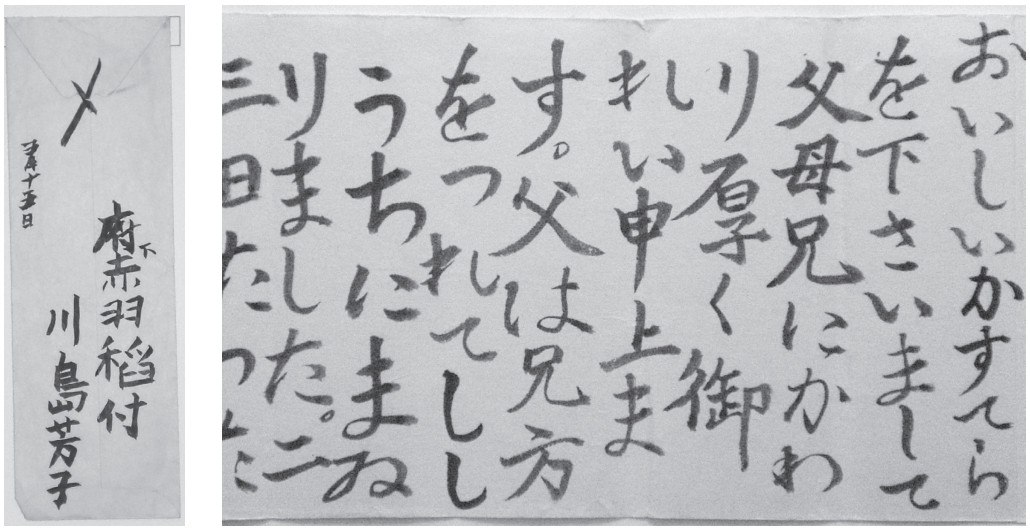
## ３：「押川家文書」について

本学の学祖である押川方義と長男方存（春浪）、清、昌一と三代にわたって受け継がれた押川家文書は、2004年に本学に寄贈されました。押川方義は、日本で最初のプロテスタント信者の一人であり、明治10年代から20年代には「西の新島、東の押川」と評されたキリスト教界の大物でしたが、後に実業界や政界へと活躍の場を広げていきます。東北学院でも学んでいた長男の方存は、のちの東京専門学校（のちの早稲田大学）在学中に「春浪」のペンネームで『海底軍艦』をヒットさせた、日本のSF小説の祖として知られた人物です。次男の清は日本で最初のプロ野球球団「日本運動協会」の設立者であり、戦後の野球殿堂入り第一号となった人物です。清の長男昌一は劇作家として活躍しました。

このように三代にわたって宗教界、文学界、政界、実業界、スポーツ界、演劇界などにかかわってきた人脈の広さから、押川家文書には多様かつ貴重な資料が含まれていました。

その中には日本人初の南極探検を行った白瀬矗と方義のかかわりを示す史料や（方義は南極探検後援会副会長に就任し、大隈重信の会長就任に尽力しました）、満蒙独立運動との関わりから知古を得たと思われる、清朝王族の一人であり女スパイとして知られた川島芳子やその実父粛親王からの書簡、方義が山県有朋と対立した「宮中某重大事件」関連の史料、押川を師と仰ぎ、後にＡ級戦犯となった大川周明からの文書なども含まれています。

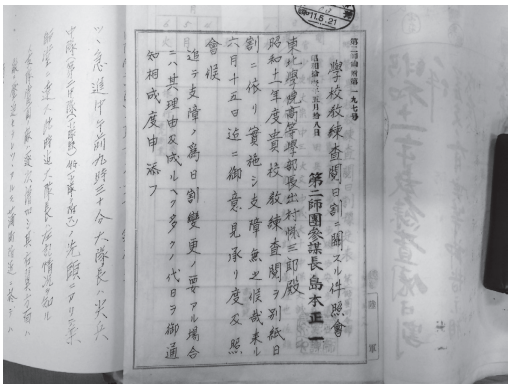
その成果の一部は『図録　押川方義とその時代』（東北学院、2013年）に収録しましたが、およそ数万点の資料のうち重要資料2000点余りを撮影し終え、現在も目録を作成中です。



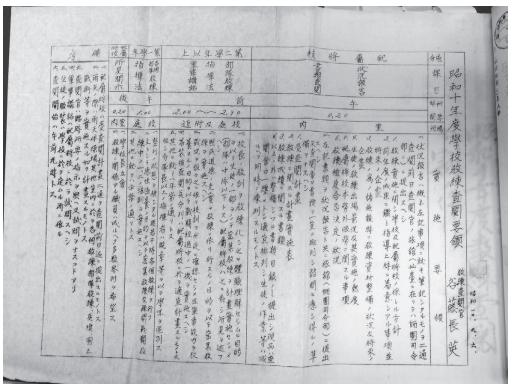

川島芳子発押川方義宛て書簡（部分）

## 4：『学校教練関係資料』３冊

史料１



史料２



史料３

次にご紹介するのは、東北大学史料館との連携企画「学都仙台と戦争」にかかわる資料です。本学には1925年から開始された学校教練関係書類が簿冊として残されていました。

その中でも特に史料的な価値が高いと考えられるものが、「査閲」に関する資料群です（史料１）。学校教練制度では、正課としての到達度を審査し、単位認定を行うために、１年に一度、陸軍の現役将校の前で教練の成果を披露する査閲が行われていました。史資料センターには大正期から1940年に至るまでの査閲にかかわる資料が残されています。

例えば左の史料２は「学校教練査閲日割」について、第二師団参謀長島本正一から東北学院高等部長出村悌三郎にあてて送られた文書です。写真の左端に同封の文書が映り込んでいますが、続く文書には具体的な査閲の際の演習行軍の詳細が記載されています。

史料３は、1935年当時の「学校教練査閲要領」です。「状況報告」から「書類査閲」、「部隊教練」から「所見開示」にいたる査閲当日の一日の行動予定が克明に記されています。

「国民道徳の充実」を教練によって行わせるとあり、キリスト教学校としてどのようにキリスト教の教義と「国民道徳」をすり合わせなくてはならなかったのか、また演習の前後には「礼拝」が行われていたことも分かっていますが、どのように「礼拝」と「演習」を両立させていたのか、このような点を明らかにすることが史資料センターの社会的役割にあたるのでしょう。

## 5：今後の展望など

このようにまだできたばかりの史資料センターですので、閲覧室のスペースも限られ、寄贈資料の保管場所などにも苦慮している段階です。現在、東北学院大学土樋キャンパスの大規模な整備計画が進んでおります。東北大学史料館をモデルとしながら、このキャンパス整備計画の中でより一層の設備の拡充、資料展示コーナーの充実化を図ることで、仙台市民、あるいは宮城県民の方々にも日常的に両史料館を周遊してもらえるような史資料センターを目指していきたいと考えています。

## 連携企画展開催報告

# 東北大学史料館×東北学院史資料センター連携企画「学都仙台と戦争」

戦後70年を迎える2015年度は、当館初の試みとして、東北学院史資料センターとの連携により以下の企画を行いました。

### ◆東北大学史料館企画展「東北大生の戦争体験」

2015年９月25日（金）～2016年１月29日（金）　東北大学史料館第１・第２企画展示室

70年前、虚脱と安堵の中で、新たな「戦後」という時代の建設がスタートしました。それは「戦争」という苦く辛い経験を経た上での「戦後」だったはずです。かつての東北大学の学生たちがくぐり抜けた「体験」を資料や証言をもとに紹介することで、戦中・戦後の学生たちが「戦争」をどのように捉え、「戦後」に何を見出そうとしていたのかを考える場を提供すべく、本展示を企画しました。第１企画展示室では、「『銃後』の学生たち」「『出陣』する学生たち」「『学徒動員』の実像」の３つのテーマを設け、戦時中の学徒出陣・学徒動員の有様を、第２企画展示室では、1945年７月10日仙台空襲から敗戦後にかけての学生生活の再建過程を、さまざまな資料や学生の回想をもとに紹介しました。特に、1946年初頭から東北帝国大学・東北学院専門学校などの学生により学校の枠を越えて組織された「在外同胞救出仙台学生同盟」など、「学都仙台」という枠組みで展開された活動に光を当てました。

### ◆東北学院史資料センター企画展「ミッションスクールと戦争」

2015年９月25日（金）～2016年１月29日（金）　東北学院史資料センター

アジア・太平洋戦争は、帝国大学にとどまらず、キリスト教を教育の基本としてアメリカなどの宣教師団体から援助を受けてきたミッションスクールにとっても、学校の根幹を揺るがす大きな出来事でした。本展示では、「ミッションスクールの動揺」「太平洋戦争下のミッションスクール」「ミッションスクールの復興」の３部構成により、1930年代前半から1940年代後半までに東北学院で起きた出来事を通して、かつての戦争がミッションスクールとしての東北学院に与えた影響や学都仙台の復興過程を考える上で、重要な資料が公開されました。

展示された資料のうち、当館からは、旧東北帝国大学工学部教授で、戦時中に東北学院に設置された航空工業専門学校の初代校長となった宮城音五郎（1883～1967）の日記（1945年分）を出陳しました。

### ◆連携ギャラリー・トーク「学都仙台と戦争」

2015年10月24日（土）

当館と東北学院史資料センターの共同により、13時から東北大学史料館、14時30分から東北学院史資料センターにおいて各担当職員によるリレー式の展示解説を行いました。

## 資料の公開について

**◆個人文書**

**①外尾健一文書（学生関係委員会等関係資料）10点　（364件）**

元法学部教授外尾健一（1924～）の学内行政（補導協議会委員等）にかかる文書。1965年（昭和40）の宮城教育大設置・青葉山移転問題、1968年（昭和43）～1969年（昭和44）の封鎖問題、1970年代の寮問題など1960年代後半から70年代にかけての会議資料やビラなど、学生運動と大学側の対応に関する資料です。

**②根本猛雄文書（60年安保関係学生運動資料）　149点**

いわゆる60年安保闘争の関係資料。東北大学・仙台のほか首都圏でのデモ、ストライキに関する新聞記事やビラが中心で、明善寮での勉強会の資料なども含まれています。

**③学生運動ビラ集「東北大学闘争史」（秋山義和氏収集資料）　2冊（377点）**

1969年の４月から10月にかけて東北大学学内で配布された大学紛争や学生運動に関するビラ・チラシ類を収集したもの。経済学部経営学科設置問題、東北大学学生会館、大学立法、大学の自治、日米安保条約、沖縄返還などに関する学生運動の各党派、及び関連団体の配布物が広く収集されており、全共闘運動の最中における東北大学の状況を知る手がかりとなる資料です。

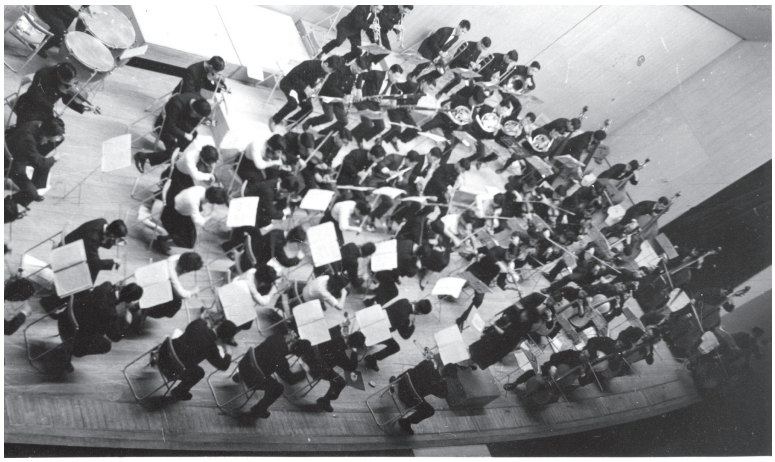
**④吉田哲雄氏収集学生運動関係資料　72点**

1968年後半から1970年（昭和45）前半にかけての学内で配布された大学紛争や学生運動に関するビラ・チラシ類を集成したもの。東北大学新寮建設、学内の民主化自治、大学立法、日米安保条約、沖縄返還などに関する学生運動の各党派、及び関連団体の配布物が広く収集されており、当時の東北大学、特に教養部における大学紛争・学生運動の状況を知る手がかりとなる資料です。

**⑤交響楽部関係史料**

東北大学交響楽部の前身は、1921年（大正10）創設の東北帝国大学音楽部にさかのぼります。同部に置かれた声楽部と器楽部が、その後の変遷を経て、1958年（昭和33）に交響楽団と三つの合唱団（男声・女声・混声）に分離しました。交響楽部（オーケストラ部）は、学友会の文化部に所属し現在まで活動を続け、1989年（平成元）には志田俊郎氏（1961年理学部卒）を編集責任者として『東北大学交響楽団史』が編集されています。

今回公開される全701点の史料は、プログラムやチラシなどに加え、同窓会活動や50年史作成に関わる史料、写真や音声史料などからなり、1990年（平成２）と2011年（平成23）の二回に分けて、志田俊郎氏から寄贈されました。



## 史料館のうごき（2015年９月～2016年２月）

### ◇館園実習を受け入れました（９月14日～18日）

博物館法の改正に伴い開設され、東北大学総合学術博物館、東北大学植物園および当館で担当している「博物館実習Ⅵ」(館園実習)の一環として、受講生11名が当館で実習を行いました。実習では、当館の日常業務や企画展「東北大生と戦争体験」の展示準備を実践したほか、企画展の一部として当時の学生の回顧録から戦争体験を紹介するパネル展示を受講生自らが企画・製作しました。

### ◇全国大学史資料協議会総会・全国研究会が開催されました（10月７日～９日）

大学史に関する情報交換と研究、並びに会員相互の質的向上と交流をはかることを目的として設立されている、全国大学史資料協議会の総会・全国研究会が東北大学・東北学院大学を会場として行われました。７日の総会では当館の八鍬友広館長の会場校挨拶、大平聡宮城学院女子大学教授による公開講演「学校資料の保存と活用」、永田英明准教授による展示会報告「東北大学・東北学院連携展示について」ののち、当館にて展示室の見学が行われました。９日には全国研究会の一環として、当館職員の案内による書庫見学会が催されました。

### ◇東北大学附置研究所等一般公開「片平まつり2015」を開催しました（10月10日～11日）

隔年の恒例行事「片平まつり2015」が片平キャンパスなどを会場として開催されました。当館は「たんけん！はっけん？しりょうかん」と銘打ち、開催中の常設展・企画展の公開のほか、特別企画として学生服・マントや角帽を着用してかつての大学生の気分を味わえる「むかしの学生に変身」、ローマ・オリンピックに出場した東北大学ボート部の記録にエルゴメーターで挑戦する「マシン・ボート体験」、“十鍬館長”が出題する東北大学にまつわるクイズを解き全問正解者に“東北大学歴史博士”の合格証を授与する「めざせ！東北大学歴史博士」を実施しました。また11日にはキャンパス内の歴史建造物やスポットを解説付きで案内する「片平キャンパス歴史散歩」も行われ、好評を博しました。

### ◇星寮のおひな様を特別公開しました（２月12日～３月11日）

2006年より行っている、東北大学病院の看護師寮「星寮」で飾られていた「星寮のおひな様」の特別公開を当館第１展示室にて行いました。昨年は館内の改修工事により公開することができませんでしたので、２年ぶりの公開となりました。

### ◇テーマ展・新公開資料速報展を行いました（２月12日～）

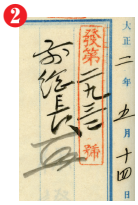
旧制第二高等学校など包摂校に関するテーマ展「もうひとつの源流―東北大学の包摂校―」、および整理が完了し新たに公開された資料を紹介する新公開資料速報展の第17回「世界レベルの研究者招聘―ハンス・モーリッシュ関係資料」・第18回「鶴の一声ぢゃ！―林鶴一文書」を当館第２企画展示室にて行いました。

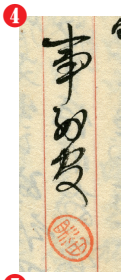
# 署名と捺印からみた 初代総長・沢柳政太郎

東北大学史料館教育研究支援者 小幡 圭祐

東北帝国大学において現在の学風「研究第一主義」を形成したと言われている初代総長・沢柳政太郎については、彼の書いた書簡や論文を通じてさまざまにその人物像が描かれてきました。ここではやや趣向を変えて、東北大学史料館が所蔵する公文書（『外国留学生関係（一）明治四十四年以降』、入試 /1995/33）に存在する、沢柳が遺した署名・捺印から、東北帝大総長としての沢柳の人物像に迫ってみたいと思います。

沢柳は書類の決裁には署名（サイン）を使っています。当時の東北帝国大学では、書類に設けられた「総長」という欄の下に総長が署名・捺印をすることで最終的な意思決定を行っていました。署名は名前の「政」の字を図案化した、いわゆる花押が用いられています（❶）。この中でも珍しいものとして「前総長」という欄に沢柳が花押を書いた書類があります（❷）。沢柳は1913年（大正２）５月９日に京都帝国大学総長に異動となっていますが、「前総長」として東北帝国大学の残務を処理していたのでした。最後まで実直に仕事をこなす側面と共に、形式に拘泥しない型破りな一面が垣間見えます。京都大学大学文書館に所蔵されている文書からも同じ花押が確認できますので（『評議会関係書類』、01A00650など）、署名については沢柳の直筆に間違いないでしょう。





沢柳が決裁の証として署名と共に用いているのが捺印（ハンコ）です。こちらは旧字体の「澤柳」を篆書で彫った楕円形の印が捺されています（❸）。しかし、署名とは違って、この捺印を沢柳自身が行ったものかはにわかに断定できません。というのも、東北帝国大学事務官の黒田賢一郎が捺した可能性も否定できないからです。その根拠は、一つには同じ書類に捺された「澤柳」印と「黒田」印の傾きが非常に似ていることです。❸と❹は同じ書類に捺されたものですが、いずれも極端に上部が左側に傾いているのがわかります（蛇足ですが、左側に傾いていることから、黒田は右手で捺印していたことが想像できます）。もう一つは、「総長」欄に「黒田」印が間違って捺されている事例があることです（❺）。このことは、黒田が沢柳に代わって「澤柳」印を捺していた可能性を示唆します。沢柳は文部省の次官経験者ですから、文部省で大臣が自らの決裁権の一部を次官に委譲するといった役割分担の慣行を大学においても行っていたことを示すものと言えるかもしれません。

そのことは同時に、沢柳が部下の黒田を信頼していたことをも意味するのではないでしょうか。黒田が1916年（大正５）に辞職する際には２代総長の北条時敬に人事や財務に亘る意見を開陳していますから（人事 /2010/H00-1～５、佐藤健治「新設帝国大学の経営」『東北大学史料館紀要』４、2009年）、大学運営に一定の影響力を持っていたことは間違いないでしょう。沢柳の活躍の裏には黒田の下支えがあったことが想像できます。ちなみに、黒田は捺印のほかに「黒田」を図案化した花押も用いています（❻）。

**東北大学史料館だより　第24号　2016年３月15日発行**
編集・発行　東北大学学術資源研究公開センター史料館
〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1　TEL 022-217-5040
E-mail desk-tua@grp.tohoku.ac.jp　URL http://www2.archives.tohoku.ac.jp/　Twitter @ T_U_Archives